



理想のために仕組みを変える

Mariko HASEGAWA 長谷川眞理子 総合研究大学院大学学長

長倉三郎先生は、大学共同利用機関を基盤とする大学院を作ろうとお考えになり、1988年に総合研究大学院大学を創設され、その初代学長に就任されました。私は、現在、本学の第6代の学長を務めております。長倉先生は化学の研究者でした。私は、進化生物学、自然人類学の研究者であり、残念ながら、研究活動の面で長倉先生とご一緒する機会はありませんでした。

多くの後輩たちを育てられた先生のご業績や活動の全般を拝見すると、大きな視野をもって将来を見通し、その実現のために動くことのできる、卓越した人物であったことがよくわかります。ご存命中に、もう少し親しくお話しする機会があればよかったですと悔やまれます。

いつだったのか、もう正確には覚えていないのですが、先生が80歳を超え、ほとんど90歳に近いころだったと思います。私が本学先端科学研究科の教授であったころ、先生が葉山の本部においでになって講演をなさったことがあります。講演の内容はとても力強いメッセージ性のあるもので、その後の質問時間にたくさんの方が質問が出ました。

ところが、先生は、しばらく熱心にそれらの質問にお答えになられたあと、「さあ、僕は次の仕事があるのもう帰らねばならない」と言われて、颯爽と会場をあとにされました。そのことに、私はとても驚きました。講演の内容そのものよりも、先生のあのときのその態度に感嘆したのです。もう90歳かというお年の方です。その方が、ご講演をされて質問にも丁寧にお答えになったあと、まだ別の仕事があるので、とおっしゃってそそくさと帰られたのです。90歳近くになられてもやっておられる重要なことがある、それをそのように「やりたい」と思ってやっておられる、ということに感激したのです。長倉先生とは、そんな学者だったのですね。

各地に散らばる大学共同利用機関である研究所群は、分野も異なれば研究方法も異なりますが、いずれ

も世界最先端の研究を実施しているところです。そのような研究現場を利用して次世代の研究者を育てよう、そこで大学院生を育てようというのが、総合研究大学院大学の設置の趣旨です。一般の大学におかれている大学院とは異なる研究現場で、オンザジョブ・トレーニングで研究者を育てようという理想です。

長倉先生がそのような発想を持たれた当時、研究所が大学院生を受け入れる仕組みはありませんでした。設立の法案を検討する議会では、反対もたくさんあったと聞いています。つまり、先生は、「今はできないということになっているが、考えの方向が良いのであれば、できるように仕組みを変えよう」と考え、実現のために動かされたのです。科学者は誰でも、「まだわかっていないことを解明しよう」という動機で研究をしていますが、研究の範囲を超えて、自らの理想を実現するために、今はできないことになっている仕組みを変えるように世の中を動かそうと踏み出せる研究者は、あまり多くはないように思います。先生は、そのような数少ない研究者の一人でした。

総研大を設立されたころの先生のお写真を拝見すると、エネルギーに満ちあふれ、ぎらぎらした熱気が伝わってくるように思います。今、こんな強烈な熱気と活動力をまき散らすような表情をする人は、たとえ若くてもあまりいないように思います。それは、時代が変わったからなのでしょう。

確かに時代は変わりました。現在の国立大学を取り巻く状況は、長倉先生が総研大を創設されたころとは様変わりしました。社会一般も変わりましたし、その社会の中で大学に期待されることも変わりました。私は、第4期中期目標・中期計画に向けて、本学の目指すところを新たに設定していくべく苦勞しています。長倉先生にご理解いただけるものができるよう、精進していきたいと思っています。